

(20020401)

### 博報堂 2002 年度入社式

博報堂は4月1日(月)午前10時30分、東京都港区芝浦の本社に新卒採用者122名を迎え、近藤道生代表、東海林隆会長、宮川智雄社長以下、在京の全役員・役員待遇、および部門長以上の幹部社員が出席して、2002年度入社式を行いました。

新入社員が一人一人紹介されたあと、宮川社長が歓迎と激励の挨拶を送り、式を終了いたしました。

なお宮川社長挨拶の内容は別紙の通りです。

以上

2002年4月1日 株式会社博報堂 広報室
-----------------------------

## 博報堂 2002 年度入社式 宮川社長挨拶内容

本日、博報堂は 122 名の大きな可能性を秘めた皆さんを、新たな仕事仲間として迎えることになりました。会社を代表し、お祝いを申し上げますと共に、心より歓迎いたします。

皆さんが社会人として、そして博報堂の一員としてのキャリアをスタートさせる「今」という時代は、一体、どういう時代なのか？ もちろん、答えを出すのは簡単なことではありませんが、現在、社会や経済が困難な状況に直面しているということは、誰もが認めるところでしょう。

「テロ・エクスキューズ」という言葉があるそうです。テロとは、勿論、昨年 9 月 11 日に起こった事件を指す訳ですが、何でもかんでもテロのせいにするという風潮に警鐘を鳴らしているのが、この言葉です。確かにこの大事件と相前後して、アメリカのみならず、地球規模で引き起こされた混乱は、日本経済に、そしてさらには、我々の広告ビジネスにも大きな影響を及ぼすこととなりました。しかし、すべてをテロのせいにしても、何ら解決を見ることはありません。それぞれが、みずからの力で道を切り拓いて行くしかありません。

私達の広告主も、国境や業種を超えた合併や提携、大規模な事業の再編といった、いわば、地殻変動のような大きな動きに身を投じ、みずから道を切り開く努力をしています。

では、そういった大きな環境変化の真っ只中、博報堂は一体何をなすべきか？

私は、一言で言うと、「創造力と実現力を、誰よりも高い次元で発揮すること」というふうに言えるかと思っています。広告主とメディアのパートナーとして、誰よりも生活者を深く知り、誰よりも新しい発想をし、そして、誰よりも確かなソリューションを提供していく、そういう力を発揮して行こうということです。

広告主の生死をかけたブランディング競争、新たなパーソナルメディアの登場、これまでにない価値観を持つニュー・エルダーという新しい生活者の登場、等々、思い付くだけでも、チャレンジしがいのある多くの変化が、皆さんを待ち受けています。

ギリシア神話に「パンドラの箱」という話があります。パンドラの箱が開いた瞬間、悪意、戦争、暴力など、ありとあらゆる邪悪が飛び散りましたが、最後にたった一つ、「希望」が残されたと伝えられています。私達、博報堂の仕事も、コミュニケーションを通じ、希望という糸を絶やすこと無く、紡ぎ続けて行くことに他ならないのです。皆さんには、一日も早く、プロフェッショナルとしての技を身に付けていただき、博報堂の、そして、社会の希望の糸を紡ぎながら、共に道を切り拓いて参りたいと思います。

以上